豊福の歴史

竹崎季長（たけざきすえなが）について

●竹崎季長の奮戦

文永１１年（１２７４年）１０月、モンゴル(元)軍の大軍が九州博多湾へ攻めてきました。教科書などでも広く知られる「元寇」の１回目となる「文永の役」です。

宇城市松橋町竹崎の地を苗字とする鎌倉幕府の御家人、竹崎季長は、わずかな家来を連れて博多にすぐに駆けつけました。

モンゴル軍の弓、やり、それに「てつはう」（大きな音を出して破裂する爆弾のようなもの）などを武器として、集団戦法をとって一騎打ちを伝統としていた日本軍を悩ませました。

季長は「弓箭(きゅうせん)の道　進むをもて賞とす。ただ駈けよ」と叫びながら、最初に敵中に突入し、乗っていた馬を倒され、自分も膝（ひざ）などに怪我をしても少しもひるまず懸命に戦いました。いわゆる「一所懸命」です。季長たち御家人の奮戦、加えて一説には大暴風雨な　どもあり、モンゴル軍は引き上げていきました。

季長はこの戦いで「戦功第一」と記録されながら、いつまで待っても恩賞の知らせが来ません　でした。意を決した季長は、翌年、鎌倉まで出かけ、３か月ものあいだ、恩賞奉行の安達泰盛に　陳情を繰り返し、戦いの手柄の褒美として海東郷(かいとうごう、現宇城市小川町海東)の地頭　職と名馬を得ました。

この文永の役から７年後、弘安４年（１２８１年）の６月に再びモンゴル軍は博多へ攻めてきました。しかし、日本軍は海岸に石塁を築いて守りを固め、モンゴル軍の上陸を許しませんでした。季長は再び博多まで出陣し、敵の大船に乗りつけて勇戦しました。

７月になると、大暴風雨が起こってモンゴル軍は兵力の大半を失い、弘安の役は終わりました。戦いを終わらせたのは大暴風雨だったかもしれませんが、国を護ろうと一所懸命に戦った竹崎季長たちの活躍も忘れてはいけません。

●海東郷の地頭職に

戦功によって得た海東郷の経営に季長は一生懸命に取り組み、神仏に対する崇敬の念も深く、菩提寺となる塔福寺（とうふくじ）を建立して出家しました。

●蒙古襲来絵詞(もうこしゅうらいえことば)の制作

絵詞は前後２巻からなり、合わせると４０メートル以上にもなります。そこに自らの奮闘ぶりやモンゴル軍との戦いの有様が描写され、さらに恩賞として領地を拝領したことなど一連の経緯が彩色された鮮やかな絵と説明文で克明に記録されています。

作成の意図については自らの武功を子孫に伝えるとともに、恩賞に預かったこと、神の加護があったことなどへの感謝の気持ちを込めたものと考えられます。原本は天草・大矢野家から宮内庁へと伝わり現在は尚蔵館に所蔵されていますが、写本を小川町塔福寺で見ることができます。

●竹崎季長が眠る墓

竹崎季長が眠る墓と伝えられているものが海東の平原にあります。墓の周辺は現在「平原公園」として整備され、季長の墓と共に、季長の武勲を讃えた東郷平八郎の書による「弓せんのみち　すすむをもて　しょうとす」という言葉が刻まれた記念碑も建っています。

記念碑に登る階段の左側の小道をしばらく歩いた先に墓はありますので、公園を訪れた際にはぜひ墓まで足を伸ばしてみてください。

＜蒙古襲来絵詞の有名な一場面＞馬に乗った竹崎季長が集団戦法の元軍と戦う様子